The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜資料紹介＞明治・大正時代ＳＰ レコード文句集について
Author(s)	金水, 敏
Citation	語文. 2001, 75-76, p. 80-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68979
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《資料紹介》明治・大正時代SPレコード文句集について

金水　敏

一　はじめに

明治三三年（一九〇〇）に日本人がパリで初めてレコードに声を吹き込み、[1]明治三六年には外国レコード会社の、日本での出張録音も始まった。以後、レコード（平円盤）は日本でも娯楽的な媒体の一つとして普及して行くことになる。このような初期SPレコードの、国語資料としての価値に気づいた研究者として清水康行氏、[2]金沢裕之氏、[3]中井幸比古氏[4]らを挙げることができる。三氏は、SPレコードの中でも、自然な口頭語に近いものとして主として落語を選んだ点が共通している（清水氏は演説もとりあげている）。

さて、初期SPレコードは雑音が多く、聞き取りにくい箇所もあるため、レコード会社が自社発売のレコードの録音内容を文字化した冊子を並行して販売することがあった。これを一般に「文句集」と称する。文句集は、単に聴取者の聞き取りを助けただけでなく、簡便な「唄本」としても利用されたことであろう。[5]文句集は明治末の出張吹き込み時代のドイツライロフォンの『文句集』及び『スタークトン象印新曲譜歌集』、米国コロンビアの『美音の栞』が古いものとのことである（後述の『全記録』前書き〈岡田則夫〉）。

本稿では、近年翻刻や復刻がなされて利用しやすくなったこの種の文句集の一部を取り上げ、概要を示し、資料的価値について若干の考察を加えることとする。

二　『美音の栞』

筆者が現在知り得た範囲で、「文句集」の翻刻・復刻として、『近代庶民生活誌』第八巻（南博責任編集、三一書房、一九八八。以下、『生活誌』とする）に収められた『美音の栞』と、『大正期芸能・歌詞・ことば全記録』全一一巻（倉田善弘・岡田則夫監修、大空社。一～六巻は一九九六年、七～一一巻は一九九七年。以下、『全記録』とする）がある。まず、前者について紹介しよう。

『生活誌』には、レコード関係資料として、英国グラモフォン社、米国コロムビアレコード社等が行った出張録音のレコード目録一二点に加えて、『写声機平円盤美音の栞』（以下、『美音の栞』）が翻刻されている。『生活誌』に収められた『美音の栞』についての解説（岡田則夫氏著）の一部を引用する。

天賞堂扱いの米国コロムビアレコードの詞章を活字化した文句集。明治四四年六月二七日、天賞堂より発行された。編集兼発行者は同社社長の江沢金五郎。本の大きさは縦約十七センチメートル、横約八・五センチメートル。本文二八四ページ。定

価表示はない。国立国会図書館蔵。

前書きに「美音の栞は編を重ねることすでに三回」とあり、本書の前に同様の文句集が三冊発行されていたことがわかる。（『美音の栞』五〇二頁）

『美音の栞』に収録されているレコードの面数を、本書の部門立てにそって集計したものを表1として示す。当時のレコードは片面版が標準的であるので、一枚一面ということになるが、両面版は二面と数える。収録時間の関係で一つの作品が何面ものレコードにまたがって収められている場合があるが、その場合、作品の数ではなく、あくまでレコードの面数として数えた。逆に、一面のレコードに複数の作品が収められる場合も、一面と数えた。

表1『美音の栞』(1911)

音楽	1
謡曲	16
薩摩琵琶	8
筑前琵琶	7
詩吟	10
軍歌	1
唱歌	12
三曲	2
長唄	44
長唄清元掛合	9
常磐津	13
義太夫	65
清元	20
新内	6
芝居台詞	9
音曲入軍談	4
落語	8
浪花節	3
影芝居	4
端唄	15
追分節	9
かっぽれ阿呆陀羅経	5
俗謡雑曲	50
計	321

残念ながら、『生活誌』は、翻刻にあたりルビを大部分削除している。このために『生活誌』所収の『美音の栞』の資料的価値ははなはだ減ぜられてしまった。おそらく原文は総ルビに近い状態ではないかと想像される。

三　『全記録』

三・一　日本蓄音器

次に、『全記録』に収められた、日本蓄音器（ニッポノホン）の文句集と東京蓄音器の文句集について見ていきたい。『全記録』は原典の版面をそのまま復刻したもので、ルビ、漢字字体、仮名遣い等ももちろん原典のままである。まず、日本蓄音器の文句集から見ていく。『全記録』では、第一巻から第九巻までに相当する。各巻の原本について列挙しておく。

1　『全記録1』：『日本蓄音器文句全集』、伊藤直基（編集兼発行）、日本蓄音器文句集全集発行所、大正二年（一九一三）一二月八日印刷、同一二日発行。

2　『全記録2』：『日本蓄音器文句全集（第二版）』、伊藤直基（編集兼発行）、日本蓄音器文句集全集発行所、大正三年（一九一四）一二月一日再版、同四日発行。
　1の末尾に作品を追加。

3　『全記録3』：『日本蓄音器文句全集（第三版）』、伊藤直基（編集兼発行）、日本蓄音器文句集全集発行所、大正四年（一九一五）三月二三日三版、同二五日発行。
　2の末尾に作品を追加。

4　『全記録4』：『日本蓄音器文句全集（第四版）』、伊藤直基（編集兼発行）、有賀彰司（発行）、日本蓄音器文句集全集発行所、大正五年（一九一六）二月一五日印刷、同二〇日四版発行。
　3の末尾に作品を追加。

5　『全記録5』：『ニッポノホン音譜文句全集（新版）』、伊藤直基

（編集兼発行）、ニッポノホン文句集全集発行所、大正六年（一九一七）七月二五日印刷、同三〇日発行。
4までの収録作品を整理・取捨選択して再編集。

6 『全記録6』：『ニッポノホン音譜文句全集（増補三版）』、伊藤直基（編集兼発行）、ニッポノホン文句集全集発行所、大正七年（一九一八）三月五日印刷、同年六月一八日発行。
5の末尾に作品を追加。

7 『全記録7』：『ニッポノホン音譜文句全集（増補四版）』、伊藤直基（編集兼発行）、ニッポノホン文句集全集発行所、大正八年（一九一九）三月二五日発行。
6の末尾に点数を追加。

8 『全記録8』：『ニッポノホン音譜文句全集（増補五版）』、伊藤直基（編集兼発行）、ニッポノホン文句集全集発行所、大正九年（一九二〇）七月二三日発行。
7の末尾に作品を追加。

9 『全記録9』：『ニッポノホン音譜文句全集（改訂増補六版）』、伊藤直基（編集兼発行）、ニッポノホン文句集全集発行所、大正一一年（一九二二）八月二六日発行。
5～8までの収録作品を整理・取捨選択して再編集。

このように、一九一三年の初版以降一九二二年まで、ほぼ毎年のように刊行されていたことが分かる（一九二一年だけ出ていない）。ただし、各巻に注記しておいたように、すべてまったく別内容というわけではなく、多くの重複を含んでいる。まず、『日本蓄音器音譜文句全集』の二版から四版までは、前年に出版されたものの末尾にその年追加された作品を継ぎ足していったもので、前年の分は版面など含め、まったく変更していない。従って、第四版（『全記録4』）を見れば、初版から第四版までの内容がすべて見られる訳である（つまり、初版から第三版は見る必要がない）。表2では、初版の分類による作品数（面数）と、第二版以降に追加された作品数（面数）を記したものである。

一九一七年の『ニッポノホン音譜文句全集（新版）』になると、作品の大幅な入れ替えと整理が行われている。すなわち、廃盤になったものもある一方で、追加もあり、全体の分類も新たに構成し直されている。どれくらいの作品が削除され、また追加されたかという点に関しては、未だ一点一点の突き合わせを行っていないので何とも言えないが、落語に関して言えば、第四版までで四九面あったもののうち新版では二六面が削除され、新たに二四面が追加された。

一九一八年以降は、新版を土台として、増補三版（一九一八）、増補四版（一九一九）、増補五版（一九二〇）と作品の追加が行われている。やはり前年の分に関しては一切変更を加えていないので、結局新版から増補五版までの収録作品は、増補五版（『全記録8』）にすべて収められているということになる。新版以後、増補五版までの追加作品数（面数）については、表3を見られたい。

一九二二年に二度目の大改訂が行われ、作品の削除と追加が行われるとともに、目次の構成も改められた。これが改訂増補六版（『全記録9』）である。落語についてのみ言えば、増補五版では八五面収められていたが、改訂増補六版ではそのうち四七面が削除され、新たに二面が付け加えられた。表4に、改訂増補六版の分類と作品数を掲げる。

このように、『全記録』には日本蓄音器（ニッポノホン）の文句集

表2　日本蓄音器文句全集

	初版(1913)	第二版(1914)	第三版(1915)	第四版(1916)	計
宗教	16				16
演説				8	8
唱歌・歌劇	58	8	4	9	79
スケッチ			2	6	8
台白			4	16	20
薩摩琵琶	46	2		2	50
筑前琵琶	28			14	42
詩吟	10				10
謡曲	22				22
長唄	56			4	60
常磐津	30		1		31
清元	10				10
歌沢節	14			2	16
新内	20				20
富本		2			2
義太夫	227	12	6	2	247
浪花節	148	46	12	18	224
説教浄瑠璃	4			4	8
お伽噺			2	2	4
落語	32	4	2	10	48
滑稽			2		2
端歌	30	1			31
小唄	146	9	11	10	176
雑曲	24	8	13	8	53
外国語之部	4				4
計	925	92	59	115	1191

が九冊収められてはいるが、作品を利用するだけなら、すべてに目を通す必要はなく、第四巻、第八巻、第九巻の三冊を見るだけでよいのである。

三・二　東京蓄音器

つぎに、東京蓄音器（東京レコード）の文句集であるが、これは次の二冊が『全記録』に収められている。

1　『全記録 10』：『東京レコード文句集　第一集』、米山正（編集兼発行）、東京蓄音器株式会社、大正六年（一九一七）九月二七日印刷、同年九月三〇日発行、大正八年（一九一九）七月一〇日再版発行。

2　『全記録 11』：『東京レコード文句集　第二集』、米山正（編集兼発行）、東京蓄音器株式会社、大正八年（一九一九）九月二八日印刷、同年一〇月一日発行。

第一集と第二集はまったく重複がない。それぞれの分類と作品数（面数）を表5と表6に示す。『全記録』前書き（岡田則夫氏）によれば、この『東京レコード文句集』は日本に数冊しか現存しない稀覯本とのことである。版面の例示は省略するが、やはり総ルビである。

四　資料的価値

四・一　音声資料の補助

国語資料としては、言うまでもなくSPレコードの音源そのものが一次資料であり、文字化されたものは一段価値が下がる。音源とその正確な文字資料が揃えば、言うことがない。SPレコードを直

表3　ニッポノホン音譜文句全集

	新版(1917)	増補三(1918)	増補四(1919)	増補五(1920)	計
演説	7				7
経文法話	6				6
唱歌・童話・童謡	63			12	75
お伽歌劇	28	8			36
薩摩琵琶	41	4	6	6	57
筑前琵琶他	54	6	8	4	72
詩吟	8				8
謡曲	22	12	6	6	46
三曲	12	7			19
長唄・常磐津等	50	36	32	86	204
清元・富本	21	10	14	26	71
歌沢		2			2
一中節・新内	21	12	2	2	37
端歌・小唄・俚謡	176	16	22	43	257
社会スケッチ	8				8
太神楽	12	4			16
阿呆陀羅経	7			14	7
書生節	8				22
法界節	10			14	10
浪花節	220		12		246
説教浄瑠璃等	20	6	8	18	34
落語・講談	50	18	8		94
お伽噺	4			10	4
活動写真	6	2	10		28
芝居	20	5		14	25
喜劇・歌劇	4				18
声色	10				10
劇歌			4		4
雑曲	32	6	6	10	54
義太夫	182	36	36	28	282
計	1102	190	174	293	1759

表5　東京レコード文句集　第一集（1917）

旧劇	24
喜劇・笑劇・悲劇	66
お伽劇・お伽歌劇・喜歌劇	52
史劇	4
活動劇	2
唱歌・軍歌	31
管弦楽	10
調和楽	2
演説	6
宗教	6
お伽噺	10
落語	42
講談	6
長唄	39
常磐津	28
清元	8
歌沢	5
新内	4
竹琴	2
小唄・端唄	87
俚謡	30
流行唄	29
義太夫	38
浪花節	54
薩摩琵琶	24
筑前琵琶	22
詩吟	4
謡曲・能狂言	9
説教浄瑠璃	10
源氏節	2
活動劇	8
太神楽	8
阿呆陀羅経	2
物まね	6
仮声	3
軽口	2
からくり	2
実写	2
計	689

表4　ニッポノホン音譜文句全集・改訂増補六版（1922）

演説	5
経文・法話	4
唱歌	55
童謡	20
新作唱歌	6
お伽歌劇	22
歌劇・劇歌	23
三曲	7
薩摩琵琶	72
筑前琵琶	44
玄海琵琶	4
詩吟	14
謡曲	48
長唄	192
清元	88
常磐津	58
新内	30
一中節	2
歌沢	12
端唄・小唄	182
俚謡	124
新小唄	6
芝居	84
芝居囃子	18
声色	16
活動写真	20
書生節	34
太神楽	22
阿呆陀羅経	6
法界節	6
説教浄瑠璃	12
落語	42
講談	4
浪花節	272
義太夫	248
万歳・地唄	10
雑	12
	1824

に聴取することは現在大変むずかしい。なぜなら、関東大震災や戦災等によって多くが失われ、またLPレコードやCDなど、技術の波に押され、過去の遺物となったSPレコードは大抵の家庭で廃棄されているからである。ただでさえSPレコードは重くてかさばる上に、もろく、割れやすいので、元来、保存には適さない。また、再生のために状態のよい蓄音器を探し出すことも今日となっては困難となってしまった。

幸い、一部のコレクターや公共機関に保存されているSPレコードをテープやCD、またCD-ROMに再録した音源がわずかながら販売されており、そういった音源を使って文句集の文字化の精度を確かめてみることもできる。今回は、そのような音源の一つであるCD-ROM付き書籍『古今東西噺家紳士録』（発行：エーピーピーカンパニー、発売：丸善株式会社。以下、『紳士録』とする）を使って、文句集と見比べてみた。

『全記録』一一巻に収められた日本蓄音器、東京蓄音器の落語レコードは作品数一一七本、レコード面数にして一八二面を数えるが、このうち、『紳士録』収録作品と一致するものが一二本あった。表7に示しておく。この表で※を付したものは、レーベルが一致しないが内容は細部に至るまで一致しているもので、おそらく同一の原盤を使用しているのであろう。

ざっと聞いたところ、聞き取りはまずまず正確と見られる。しかし、早口の部分などでは細かい聞き誤りがしばしば生じているようである。日蓄一〇八四番の「西洋の結婚」（二代目橘家三好）を例に取ってみると、原文二八行の間に、明かな聞き誤りと思われる箇所が九箇所あった。また、特に問題となるのがルビの信頼性である。日蓄一〇九四番の「宇治中納言」（春風亭楓枝）では、「落語家」が八回現れ、すべて「らくごか」とルビが振られているが、録音ではすべて「はなしか」と言っている。同種の誤りは、他にも多数見出される。これは、総ルビ時代にはよくあったことと言われるが、原稿を作った人物とルビを付けた人物が別であったことを暗示している。原稿は丁寧に聞き取りをしたとしても、ルビを付ける人物は、編集の段階で、音源に帰ることもせず、適当に付けていったのであろう。

このように、文句集は音源が入手できる場合に限って、音声資料の補助として一定の役に立つと思われるが、音源がない場合、国語資料（とくに音声資料）と

表6　東京レコード文句集　第二集（1919）

喜劇・笑劇・悲劇他	80
唱歌・歌劇・軍歌	23
調和楽	2
お伽噺・お伽琵琶	10
落語	20
講談他	11
長唄	26
常盤津	6
清元	4
歌沢	8
新内	4
一中節	2
明笛	3
小唄	51
端唄	12
俚謡	4
流行唄	23
義太夫	28
浪花節	50
薩摩琵琶	10
筑前琵琶	20
詩吟	6
謡曲	4
仮声	6
計	413

表7 『全記録』所収落語と『紳士録』所収音源の共通演目

	題目	演者	レコード番号	『全記録』所収場所
1	長屋の花見	馬楽，蝶花楼	日2097	1:457 ※
2	宇治中納言	楓枝，春風亭（四代目都家歌六）	日1094	1:462, 5:451 ※
3	西洋の結婚	三好，橘家	日1084	1:464, 5:449
4	壁金(飴屋) 上	蔵之助，橘家	日2456	1:466, 5:466, 9:428
	同 下		日2457	1:468, 5:468, 9:429
5	専売芸者 上	つばめ，柳家	日0718	5:445
	同 下		日0719	5:447
6	掛取萬歳 上	圓太郎，橘家	日0359	5:463, 9:427
	同 下		日0360	5:464, 9:428
7	京染め 上	花咲，桂（上方）（一輪亭花咲）	日4404	9:451
	同 下		日4405	9:451
8	箱根の関所 上	勝治郎，三升亭	東0305	10:437
	同 下		東0306	10:438
9	宗旨争ひ 上	圓橘，三遊亭	東0327	10:444
	同 下		東0328	10:446
10	玄冶店	小三太，柳家	東0067	10:812
11	伊勢詣 上	志ん馬，古今亭（上方）	東0576	11:215
	同 下		東0577	11:217
12	売声 上	圓鏡，月の家（三代目三遊亭圓遊）	東1131	11:266
	同 下		東1132	11:268

レコード番号の「日」は日本蓄音器，「東」は東京蓄音器を表す。
また，『全記録』所収場所は巻と頁番号で示している。1:457なら，1巻457頁である。

して用いるにはそれなりに慎重な態度が必要である。

四・二 その他の価値

音声的な面ではあまり期待はできないとして、限定的ながら、例えば近代国語の語彙や文法、あるいは文字・表記の資料として文句集を活用することはもちろん可能である。しかし、本資料群の真骨頂は、何よりもそこに収められた作品のヴァリエーションそのものであろう。義太夫、長唄のような伝統芸能、薩摩琵琶・筑前琵琶や浪花節のような新出の邦楽、また歌劇や新劇等の洋風芸能まで、明治・大正に流行した芸能を一堂に見渡すことができるという点で、これらの文句集は何にも代え難い価値と魅力を持っている。それらの中には、今日ではその存在すら忘れ去られた作品も少なくない。(6) 例えば一部の新劇やお伽歌劇など、芸術的価値の観点から見れば低いものではあっても、文字面を見ているだけで楽しくなるような作品が多数収められており、時代の雰囲気を直接今日に伝えてくれているのである。

狭い意味での国語学的価値はさておいても、言語文化史的な観点からここに収められた作品群を総体的に検討する作業が必要であるように思われる。その作業の中から、日本の言語や文化についての新たな知見が導き出される可能性は十分に大きい。ステレオタイプな近代史観から逃れ、我々自身の目で日本の近代を「再発見」する営みにもつながっていくようにも思われる。

付記

本稿をなすに当たって、平成一二年度大阪大学文学部における国

語学演習参加者の調査と、彼等とのディスカッションが大いに参考になった。一々名を挙げることは省略するが、記して感謝いたします。

注

(1) 清水（一九九八）参照。音源をCD『よみがえるオッペケペー――一九〇〇年パリ万博の川上一座』（東芝EMI、TOCG-5432）で聴くことができる。

(2) 清水（一九八一）以下の諸論文参照。

(3) 真田（一九九一）、金沢（一九九八b）。

(4) 金沢（一九九八a）、中井（二〇〇〇）。

(5) 『生活誌』掲載の『美音の栞』解題（岡田則夫氏執筆）参照。

(6) 例えば志賀直哉「暗夜行路」に名前が見える「松江節」が『全記録3～9』に見えるが、この民謡は現地松江でも忘れ去られ、歌える人がいないとのことである（筆者の担当する大阪大学文学部の国語学演習における、越野道子・征矢悠子両氏の調査による）。

参考文献

金沢裕之（編）（一九九八a）『初期落語SPレコードの大阪アクセント――資料と分析』平成一〇年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書（担当執筆者：中井幸比古）

金沢裕之（一九九八b）『近代大阪語変遷の研究』和泉書院

倉田善弘（一九七九）『日本レコード文化史』東京書籍

真田信治（編）（一九九一）『二十世紀初頭大阪口語の実態――落語SPレコードを資料として』平成二年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書（担当執筆者：金沢裕之）

清水康行（一九八一）「快楽亭ブラックと平円版初吹込」『國文鶴見』一六、四〇―四八頁

清水康行（一九八二）「今世紀初頭東京語資料としての落語最初のレコード」『言語生活』三七二、五〇―五九頁

清水康行（一九八六a）「二十世紀初頭の東京語子音の音価・音訛」築島裕博士還暦記念会（編）『築島裕博士還暦記念 国語学論集』明治書院、四二八―四四六頁

清水康行（一九八六b）「二十世紀初頭の東京語母音の音価・音訛――落語レコードを資料として」松村明教授古稀記念会編『松村明教授古稀記念 国語研究論集』明治書院、八〇三―八一八頁

清水康行（一九八七）「はなしことばの音声――二十世紀初頭東京落語レコード資料の場合」『国文学 解釈と鑑賞』五二・七、五六―六三頁

清水康行（一九八八）「東京語の録音資料――落語・演説レコードを中心として」『国語と国文学』六五・一一、一二九―一四三頁

清水康行（一九八九a）「録音資料で聴く過去の音声の実例」『国文学解釈と鑑賞』五四・一、一六―二一頁

清水康行（一九八九b）「二〇世紀早期の演説レコード資料群に聴く合拗音の発音」『名古屋大学 国語国文学』六四、三三―四四頁

清水康行（一九九八）「《短信》最も早い日本語録音資料群の出現――一九〇〇年パリにおける川上音二郎一座の平円盤録音」『国語学』一九三、一二六―一三〇頁

中井幸比古（編）（二〇〇〇）『大阪アクセントの史的変遷』平成一一年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書

都家歌六（一九八七）『落語レコード八〇年史（上）（下）』国書刊行会

――本学大学院助教授――